

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：33929

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00403

研究課題名（和文）翻訳された自然 19世紀アメリカ文学と自然史

研究課題名（英文）Translated Nature: 19th Century American Literature and Natural History

研究代表者

竹野 富美子（Takeno, Fumiko）

東海学園大学・教育学部・准教授

研究者番号：20751746

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、エマソン、ソローの自然へのアプローチと翻訳行為との関連性を明らかにすることができた。研究成果について、令和3年度には国際学会、NeMLA年次大会および日本ナサニエル・ホーソン協会名古屋支部において口頭発表し、令和4年度には日本ソロー学会2022年度全国大会シンポジウムに登壇、またNeMLAの設立50周年記念号に論文を掲載した。令和5年度には新英米文学学会誌『New Perspective』および日本ソロー学会会誌『ヘンリー・ソロー研究論集』に論文を投稿し受理された。その他最終年度の研究成果を論文としてまとめ、学会誌に投稿し近年度中に発刊される予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目的は、エマソンやソローの自然観を、19世紀の自然史をめぐる言説空間や北米における自然史研究の重層性に目を配りながら、エマソンやソローの自然観を「翻訳」を鍵概念として問い直すことにあった。本研究の学術的意義は、近年の米文学研究における問題意識を共有し、国際間の知的ネットワーク、国際政治的背景などに着目し、19世紀米文学を俯瞰的に把握しようと試みたこと、さらに自然史研究を自然の「翻訳」作業ととらえることで、エマソンやソローが実際に行った翻訳や、翻訳への考え方を、翻訳研究の成果をもとに分析しこれまでの研究では捉えられてこなかった、エマソンやソローの自然観に新たな考察を加えたことにある。

研究成果の概要（英文）：This project explored the relationship between translation and natural history in the works of Henry David Thoreau and Ralph Waldo Emerson and found that the act of translation was closely connected to these writers' formation of the concept of nature. In *Nature*, Emerson considered nature itself "a language" and argued that the study of natural history is an attempt to translate that language. For Emerson, who believed that "nature" and "human mind" are in correspondence, the act of translating nature can be seen as a unique act that creates a "translation space" from the encounter between mind and nature. The results of this study were presented at four academic conferences (including an international conference) and published as articles in three journals and a book.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 環境 翻訳 19世紀 自然史

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2018年から20年まで行ったJSPS科研費JP18K00394「19世紀アメリカ文学に見る自然史と越境的想像力」で検討した研究課題を継承し、発展させたものである。同研究では、情報技術の進展に伴う社会のグローバル化によって、これまで準拠枠としてきた国家や地域、共同体のありかたが問い直されているとの現状認識をもとに、19世紀アメリカがおかれていた政治経済的文脈から、アメリカ文学の世界観に影響を与えていた自然史をキーワードに、アメリカ文学作品を捉えなおすことを意図していた。この研究で明らかになったのは、19世紀米国における自然史研究の多様性だった。ヨーロッパが主導とした自然史研究はアメリカ南部、北部においてお互いに影響を与えながらも、独自の発展を遂げるようになる。当研究ではヘンリー・デイヴィッド・ソロー、エドガー・アラン・ポーの作品を取り上げ、それぞれの作品の自然史研究とのかかわりを分析した。両者とも、南アメリカの探索をもとに、初めて「エコロジー」という概念を提示したドイツの自然史研究者アレクサンダー・フンボルトに影響を受けている。しかしながら、奴隷制を基礎とした経済構造に依存し、それに寄与する自然史研究の傾向があった南部の文化を色濃く反映するポーと、国内市場の開拓のために発展した北部の自然史研究に触れていたソローとでは両者とも、フンボルトが着想した地球規模の生態系という視野に立脚しながらも、違いがあることがこの研究において浮き彫りとなった。

同研究では気づきがありながらも、取り上げることができなかったのは、当時の自然史研究が環境を「翻訳」する活動でもあることだった。アラン・ビウエルによると、18世紀から19世紀自然史研究者は植民地において商品作物を強制栽培するために、移植可能な植物や環境を「翻訳」し、探索することが必要だった。その地域特有の環境は、帝国貿易圏において地球規模に移動し移植され、フンボルトが懸念したように植民地の環境を激変させた。一方で、自然史研究に埋め込まれた、このような「自然を翻訳する」行為は、外国文学を積極的に翻訳し、享受していたエマソンやソローの自然観にも反映されていることが予見された。(Allan Bewell, *Natures in Translation: Romanticism and Colonial Natural History*. Johns Hopkins, 2014.)

2. 研究の目的

本研究の目的は、エマソンやソローの自然観を、19世紀の自然史をめぐる言説空間や北アメリカにおける自然史研究の重層性に目を配りながら、エマソンやソローの自然観を「翻訳」を鍵概念として問い直すことにあった。本研究の学術的独自性と創造性は、近年の米文学研究における問題意識を共有し、「アメリカ合衆国」という国の枠組みからだけでなく、国際間の知的ネットワーク、国際政治的背景などに着目し、19世紀アメリカ文学を俯瞰的に把握しようとする試みと、さらに自然史研究を自然の「翻訳」作業ととらえることで、エマソンやソローが実際に行った翻訳や、翻訳への考え方を、翻訳研究の成果をもとに分析しこれまでの研究では捉えられてこなかった、エマソンやソローの自然観に新たな考察を加えることにある。

19世紀中葉の北部ニューイングランドの風土を舞台に展開した超絶主義は、アメリカ文学史上では、ヨーロッパからの知的独立を目指すナショナリスト的傾向を持っていたことが特筆されるが、近年ではヨーロッパや東洋の思想を積極的に吸収するコスモポリタンの特徴が注目されている。この時代には、超絶主義者をはじめとする知識人たち、たとえばヘンリー・W・ロングフェローがダンテの『神曲』を初めて英語に翻訳するなど、翻訳活動が盛んだった。超絶主義者として活躍したマーガレット・フラーもまた多言語に通じ、ドイツ文学の翻訳を手掛けており、エマソン自身もラテン語やフランス語、ドイツ語などの外国語の作品を翻訳している。ソローもまた、フランス語に翻訳された論語や、

## 【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

ラテン語ギリシア語の古典を英語に翻訳し日誌に記すなど、コスモポリタンの視野を醸成していた。エマソンとソローは超絶主義の機関誌『ダイアル』で、「民族の聖典」というコラムを企画し、翻訳され活字になった東洋の思想を紹介するなど、翻訳を通じた東洋思想理解にも努めていた。

エマソンが感銘を受け、ナチュラリストになろうと決意したパリ植物園での展示は、ヨーロッパの自然史研究が植民地経営を通して集めた世界の「翻訳」であり、「コスモポリタン」な世界を形成する空間でもある。エマソンはそれをアメリカ固有の世界観に「翻訳」しなおし「自然史の効用」や『自然』といった作品を書いたといえることができるだろう。当時の自然史をめぐる重層的な言説空間に目を配りながら、自然史研究に内在する「翻訳」を鍵概念にしてエマソン、ソローの作品を比較検討することは、ソロー、ジョン・ミュアアの環境文学に影響を与えたエマソンや、グローバル化の時代においても現代の読者に支持されているソローの文学的想像力のありかを理解し、今日にも通じる、国を超えた知のネットワークのダイナミズムを探る上でも重要であり、研究の意義は大きいと考えた。

### 3. 研究の方法

本研究ではまず、翻訳研究理解のために関連資料を収集して読み込み、その動向を整理した。翻訳研究の分野は近年、活発に議論され研究成果が発表されてきている。ローレンス・ヴェヌティ、カレン・エメリッヒ、エミリー・アプターなどが議論する、「オリジナル」という概念にゆさぶりをかける翻訳論に加えて、マイケル・クローニンが翻訳行為を言語間のみならず自然や物理的事物との行為として捉える「エコトランスレーション」を提唱する。これらの先行研究の知見をもとに、ソローやエマソンなどの自然を描いた作品を翻訳行為という観点から分析した。特にエマソンの「自然史の効用」『自然』、ソローの『ウォールデン』『ウォーキング』に注目し、関連する研究資料を収集し、整理した。そこで明らかになった同作品と自然史、翻訳との関連について、研究結果を国内外の学会において口頭発表した後に、研究成果を論文や書物にまとめて、発表した。

### 4. 研究成果

本研究では特に、エマソン、ソローやポーの自然へのアプローチと翻訳行為との関連性を明らかにした。『自然』においてエマソンは、自然そのものを「ひとつの言語」とみなし、自然史研究とはその言語を理解しようとするのだと主張している。「自然」と「精神」は照応関係にあると考えるエマソンにとって、自然を翻訳する行為とは、ヨーロッパの帝国主義経営と自然資源管理のための翻訳行為と共振しながらも、自然との相互影響性をもつ「翻訳空間」を作り出す独自の行為だったとみなすことができる。またウォールデンの森にギリシア神話の世界を幻視していたソローにとって、ギリシア古典を翻訳しその世界を体感することと、自然の世界を理解することは同一線上にあったと考えられる。研究を通して得られた以上の考察をもとに、個別の研究としては、エマソンの「自然史の効用」と『自然』、ソローの『ウォールデン』『ウォーキング』を取り上げ、両者の翻訳行為と自然観とのつながり、そしてそこにみられる両者のアメリカ的特徴について分析した。

これらの研究成果について、令和3年度にはエドガー・アラン・ポーの作品にみられるグローバルな視点についての考察を日本ナサニエル・ホーソン協会名古屋支部において発表、アメリカの学術団体 Modern Language Association の地方支部、NeMLA の年次大会で、“Straying into the Real World Market: Walking And Edgar Allan Poe’s ‘A Tale of the Ragged Mountains,’ ” を口頭発表した。令和4年度には、日本ソロー学会 2022 年度全国大会シンポジウム「ソローと 19 世紀の作家たち—アメリカン・ルネサンスを再構築する」において、講師として「ナサニエル・ホーソンの戦後処理 -

【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

ポストベラム期の回想記を読む」を公表した。2023年2月には NeMLA の設立 50 周年記念号となる『Transnational Spaces: Celebrating Fifty Years of Literary and Cultural Intersections at NeMLA』(edited by Carine Mardorossian and Simona Wright, with eight contributors, Vernon Press)において“ The Global Imagination of Edgar Allan Poe: 'The Gold-Bug' and Natural History in South Carolina ”を掲載した。ここではエドガー・アラン・ポーの「黄金虫」に見られる、19世紀自然史の歴史に基づく世界観を検討し、登場人物であるルグランが暗号の解読のために自然史の知識を駆使し、その解釈行為を“translate”と称していたことを指摘した。

令和5年度にはヘンリー・D・ソローの翻訳行為と自然へのかかわりを検討した論文「『自分のイタカの海辺に座る』 ソローの作品に見る古典と翻訳」を、新英米文学会誌『New Perspective』(2023年9月)に投稿し受理された。また、論文「ナサニエル・ホーソーンの後処理 - ポストベラム文芸批評空間におけるホーソンとソローの受容」が、日本ソロー学会誌『ヘンリー・ソロー研究論集』(2024年1月)に所収された。その他2023年8月には、日本ナサニエル・ホーソン協会中部支部例会において「エマソンとソローの作品に見る自然と翻訳」を公表した。また、最終年度の研究成果として論文「初期エマソン作品に見る自然と翻訳」をまとめ、2024年3月に学会誌に投稿し受理され、近年度中に発刊される予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹野富美子	4. 巻 217
2. 論文標題 「自分のイタカの海辺に座る」 ソローの作品に見る古典と翻訳	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 New Perspective	6. 最初と最後の頁 34-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹野富美子	4. 巻 49
2. 論文標題 ナサニエル・ホーソーンの後世処理 - ポストベラム文芸批評空間におけるホーソーンとソローの受容	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ヘンリー・ソロー研究論集	6. 最初と最後の頁 34-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 竹野富美子
2. 発表標題 エマソンとソローの作品に見る自然と翻訳
3. 学会等名 日本ナサニエル・ホーソーン協会中部支部
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 竹野富美子
2. 発表標題 「ナサニエル・ホーソーンの後世処理 - ポストベラム期の回想記を読む」
3. 学会等名 日本ソロー学会2022年度全国大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 竹野富美子
2. 発表標題 「グローバルヒストリーから見るエドガー・アラン・ポー『鋸山奇譚』」
3. 学会等名 日本ナサニエル・;ホーソン協会名古屋支部（オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fumiko Takeno
2. 発表標題 “ Straying into the Real World Market: Walking And Edgar Allan Poe ’ s ‘ A Tale of the Ragged Mountains, ’ ”
3. 学会等名 Northeast Modern Language Association ( 国際学会 )
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Fumiko Takeno, et al., edited by Carine Mardorossian and Simona Wright	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Vernon Press	5. 総ページ数 115
3. 書名 Transnational Spaces: Celebrating Fifty Years of Literary and Cultural Intersections at NeMLA	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関